

キルギス共和国、アク・ベシム(スイヤブ)遺跡の調査(2018年)

山内 和也 帝京大学文化財研究所教授
 櫛原 功一 帝京大学文化財研究所講師
 望月 秀和 帝京大学文化財研究所研究員

Archaeological Investigation at Ak-Beshim (Suyab), Kyrgyz Republic (2018)

YAMAUCHI, Kazuya Professor, Research Institute of Cultural Properties, Teikyo University
 KUSHIHARA, Kouichi Lecturer, Research Institute of Cultural Properties, Teikyo University
 MOCHIZUKI, Hidekazu Researcher, Research Institute of Cultural Properties, Teikyo University

キルギス共和国、アク・ベシム(スイヤブ)遺跡の調査(2018年)

1. はじめに

帝京大学シルクロード学術調査団とキルギス共和国科学アカデミーの合同調査団は、2016年からキルギス共和国北部に位置するアク・ベシム遺跡で発掘調査を行っている(図1)。この遺跡はかつて「スイヤブ」(碎葉、素葉)と呼ばれるシルクロードの拠点的な交易都市で、2014年には「シルクロード：長安-天山回廊の交易路網」の構成資産の1つとしてユネスコの世界遺産リストに記載された。遺跡は隣り合う2つの都市遺跡からなり(写真1)、かつてこの2つの街の外側に長大な外壁が巡っていた。そのうち西側の台形状の街は、現在、第1シャフリスタンと呼ばれる都市遺跡である。5~6世紀頃にシルクロードの交易の民、ソグド人が建設したとされる街で、10~11世紀にいたるまで国際交易拠点として繁栄した。その東側の区画が第2シャフリスタンで、唐が建設した「碎葉鎮城」で

ある。少なくとも679年には建設され、8世紀の初めには放棄された唐の軍営地で、かつて「ラバト」あるいは契丹区と呼ばれ、11~12世紀頃の都市遺跡と考えられている。

1967年の航空写真(写真1)によれば、現在第2シャフリスタンと呼ばれる地区には不整五角形の外周壁とその中の長方形の内城壁、内外壁の内側の建物の痕跡等が確認できる。しかしながら、1970年代の大規模な耕地整備のため、現在では東壁と南壁の一部を除き、かつての痕跡の大部分は失われている。

この第2シャフリスタンが碎葉鎮城と推定されるが、これは唐の時代、西域統治および西方進出のために置かれた安西都督府(安西四鎮)の1つである。安西四鎮は、一般に亀茲(クチャ)・于闐(ホータン)・疏勒(カシュガル)・焉耆(カラシャール)とされるが、唐の勢力がもっとも西に拡大した時期に最西端の拠点として「碎葉鎮」が設置された。

その正確な位置については長らく不明であったが、1982年に偶然発見された「杜懷宝碑」によってアク・ベシム遺跡がかつてのスイヤブ(碎葉)であることがほぼ確定した。さらには、2017年、第2シャフリスタンで唐代の瓦片が帯状に堆積した状況(幅約2m×長さ約25m)が検出されたことによって、第2シャフリスタンが碎葉鎮城であったことを裏付ける重要な証拠が得られている。

本発表では、アク・ベシム遺跡、すなわちスイヤブの発掘調査で得られた2018年度の成果および新たな知見について紹介する。

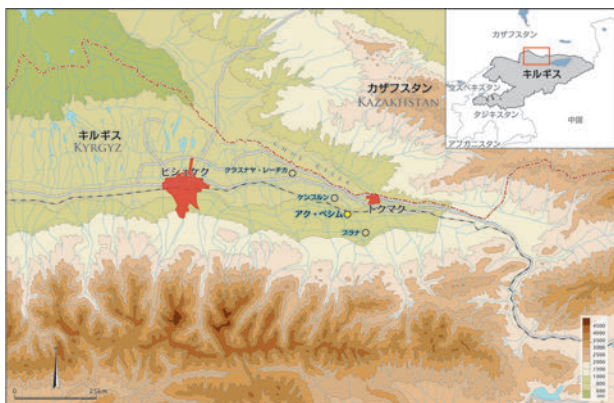


図1 アクベシムの位置



写真1 1967年の航空写真(1は第1シャフリスタン調査区、2は第2シャフリスタン調査区)

2. 第1シャフリスタンの調査

第1シャフリスタンの成立時期については不明だが、玄奘は630年頃、インドへの求法の旅の途上でこのスィヤブに立ち寄り、西突厥の可汗と面会していることから、少なくとも7世紀にはスィヤブという都市が存在し、この地域の中心地となっていたことは明らかである。

第1シャフリスタンの平面プランはやや不整形の台形で、東西方向の長さは約740m、南北方向の長さは約530mである。南壁と北壁の中央付近にはそれぞれ門があり、現在でも南門と北門を結ぶ街路の痕跡を確認することができるが、それと比べ、東壁と西壁の門の痕跡はさほど明瞭ではない。しかしながら、1967年の航空写真やそれ以前に作成された遺跡地図によれば、かつて南門と北門を結ぶ街路、そして街を東西方向に結ぶ街路が存在していた。発掘地点は、この十字

路のやや南側に位置している。

この十字路は第1シャフリスタンの中枢部となる街路であり、街の構造を考えるうえで重要な地点であること、街路が交わる地点は広場となっていた可能性が高く、周辺には行政や、ゾロアスター教神殿などの宗教施設が想定される地点でもあり、大通りと両側の建物群との層位関係を理解することで、文化層の形成過程を明らかにしたいと考える。

調査区全体の大きさは東西30m、南北20mである。その中央、北北東－南南西の方向に伸びているのが、南門と北門を結ぶ街路である。その両側には、それとほぼ直交するようにして、東西方向の日干しレンガの壁があり、その壁の間が建物や路地として利用されている(写真2)。

街路の基本的な構造は、両側が一段高くなり、歩道状を呈している。その間の低くなった部分が道路で、中央部には道路に平行して溝が掘り込まれている。こ



写真2 第1シャフリスタンの街路

の構造は現在の西アジアの街中에서도見られるもので、中央の溝は雨水の排水路として機能するものである。また低くなった道路部分には、一面に土器や動物骨の破片、石が散乱、堆積している。

出土状況に基づけば、この街路は人などの往来に利用される「通路」だけでなく、雨水や生活排水の排水路として、さらには、生活ゴミの捨て場としても機能していたと考えられる。街路にはゴミが捨てられ、季節によって雨水でぬかるむことがあったため、両側に一段高くなった歩道を設置したものであろう。現在見られるようなゴミ収集のシステムが存在していなかった当時、日常的に生じるゴミは街路に捨てていたものと考えられる。調査区の北東部分に堆積していたゴミもまた、都市内におけるゴミ処理の結果であり、広場がその機能を失った段階で、日常的なゴミ捨て場として利用されたものである。また、調査区内で検出された穴も「ゴミ穴」として利用されたものであろう。

なお、この「ゴミ」の廃棄は、なぜ、遺跡が丘のように高くなっているのかということを解明する糸口になる。街路にゴミを大量に捨てることによって、しだいに道路面が高くなり、結果的に建物内部の床面が道路面より低くなることで建物から街路に出るにも不便となり、また、ときには雨水や汚水が街路から建物内部に流れ込むような事態が起こったことが考えられる。

それゆえ、街路面がある程度高くなった時点で、建物の床面を上げ、改築する必要が生じたものと推測される。その結果、しだいに街全体のレベルを高くしていったのではないかと。現時点では1つの仮説にすぎないが、今後の発掘調査によって解明すべき課題である。

街路の両側には、壁で区画された建物や路地が存在している。街路の西側では、間口が狭く、奥行きが深い長方形の建物群が連続し、入り口は街路に面している。建物群の壁は切り藁(スサ)を混ぜた日干しレンガを積んで構築されている。長方形の区画の内部は間仕切り壁でいくつかの小さな部屋に区画され、街路に面して大きめの部屋、その奥に小さな部屋があるという構造となる。また部屋の壁際に「スーファ」と呼ばれるベンチ状の構築物が設置され、いくつかの部屋ではパン焼き竈が見つかった。

調査区の北東部、街路の東側では大量のゴミの堆積が確認され、その下層では東西方向に伸びる壁、さらにその下層には平らな面が広がっている。また西側では、上層に(金属加工?)工場の痕跡、その下層では砂利を敷いた路面が検出されている。現時点では、ここはおそらく、街路の交差点に位置する広場の南端にあたるものと考えられる。もともと南北方向と東西方向の街路があり、その交差点には広場が位置し、街の中心の1つとして機能していたものと推測される。しか



写真3 第2シャフリスタンの調査区

しながら、街そのものがしだいに衰退し、広場としての機能が失われるのにつれ、その一角がゴミ捨て場として利用されるようになったのであろう。

3. 第2シャフリスタンの調査

現在、第2シャフリスタンと呼ぶ地区は、かつて唐が築いた碎葉鎮城であった。碎葉鎮城の建設については、『旧唐書』巻185上「良吏伝上 王方翼」に記録が残されている。「さらに(王方翼は)碎葉鎮城を築いた。4面に12の門を立て、(それらの門は)すべて屈曲していて、(兵の)出撃と退却を隠す形となっていた。50日で完了した。西域の胡人たちが競いやって来てこれを見て、土地の物を献上した^{おうほうよく}」。王方翼がこの碎葉鎮城を築いたのは679年とされている。

1970年代の大規模な耕地整備のため、現状では東壁と南壁の一部を除いて碎葉鎮城の痕跡は確認できないものの、1967年の航空写真(写真1)によれば、外壁の平面プランは不整五角形であり、東西方向の長さは約720m、南北方向の長さは約1200mである。また、その内側には東西方向の長さ約252m、南北方向の長さ約305mの長方形の区画(以下「シャフリスタン2a」と呼ぶ)があった。

この第2シャフリスタンでは、南壁、第1シャフリスタンと共有する西壁(第1シャフリスタン東壁)、そしてシャフリスタン2aで発掘調査を行った。南壁と西壁では、中国の「版築工法」に類似した工法で築か

れた壁、中枢部と考えられるシャフリスタン2aでは帯状に堆積した瓦の破片、花の文様を描いた石敷きと井戸状遺構、塼で構築された雨落ち、瓦片を並べた建物の基礎など、いくつかの建物の痕跡が検出されている。

これまでの調査によって、シャフリスタン2aの内部にはさまざまな建物が存在することが明らかとなった(写真3)。また、この建物の痕跡を見る限り、碎葉鎮城は2度もしくは3度にわたって改築されたこと、そして2018年に発見された石敷きと井戸状遺構といった遺構群が、碎葉鎮城創建段階のものであることが分かってきた。これが、王方翼によって建設された「碎葉鎮城」であるのかどうか、今後の調査によって明らかになっていくことが期待される。

シャフリスタン2aのやや北寄り、南北方向にトレンチを設定して発掘調査を実施したところ、北側では、カラ・ハン朝期に属すると考えられる遺構や遺物が検出された。その一方で、南側では唐代のものと考えられる大量の瓦片が出土した(写真3)。

瓦片は帯状(南北25m以上、幅約2m)に堆積し、その主軸は、南北方向からやや北西側に振れており、長方形の区画の主軸方向に沿っている。瓦の堆積に直交する断面の土層観察によれば、瓦片の堆積は西に向かって下のように傾斜している。瓦片の間には炭化物及び焼土が多量に混入することから、瓦を載せていた建物(おそらく木造建物)が焼け落ちた際に崩落した可



写真4 花の石敷きと井戸状遺構

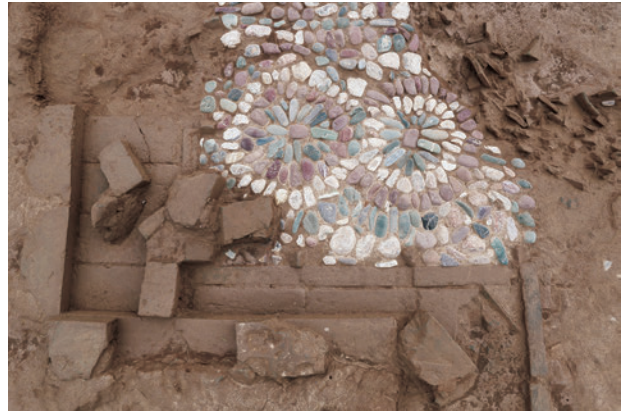


写真5 石敷きと雨落ち



写真6 石敷き



写真7 雨落ち

能性が高い。炭化物の年代測定では、7～8世紀の推定年代が得られている。瓦帯の東側では堅く、良く締まった土の堆積が確認されているが、これは建物の基壇であった可能性がある。

出土した瓦片の分析によれば、これらの瓦片には平瓦、丸瓦、熨斗瓦、軒丸瓦が含まれている。丸瓦の1点には漢字(「口懐」)がヘラ書きされており、アク・ベシム遺跡における最初の漢文資料の発見となった。

石敷きは、赤や白、緑などの川原石を組み合わせ、花の文様を描き出したものである(写真4～6)。北側の石敷きは長さ3.5m、幅1.1mで、ほぼ東西方向に伸びている。その西側は後述する建物の縁石に接し、東側は後世のゴミ穴によって壊されている。やや縦長の石を用いて直径約50～80cmの6輪の放射状の花の文様が造られており、もとは上下2列になっていたものである(写真5)。石敷きは、長軸に沿って中央部分がやや盛り上がり、短軸方向に緩やかな凸面となっている。井戸状遺構の部分では、石敷きが穴の縁に沿って円弧状になり、この縁の部分の石は整然と並んでいる。また、井戸状遺構の北側部分では、ちょうど

人が足を開いて立った幅に見合う部分で石敷きが窪んでいることが確認されている。

西側の石敷きの長さは3.5m、幅0.6mで、ほぼ南北方向に伸び、直径約50cmの6個の花の文様が一行に並んでいる(写真6)。北側の石敷きと同じように、長軸に沿って中央部分がやや盛り上がり、短軸方向に凸面となる。南端は、1段の小端平張り積み(塼の小端を上端にして積む)による幅約10cmの溝で区画されている。石敷きはさらに南側の瓦帯に続いていくが、やや時代の新しい溝によって壊されている。

井戸状遺構の穴の直径は約1.8mである。今回の調査では、この円形をなす遺構を半裁し、深さ約110cmまで発掘を行った。断面の土層観察によれば、この井戸状遺構は放棄される際に埋め戻されたものと考えられる。その後、北西側の建物が倒壊した際に穴の西側が瓦片によって覆われ、穴の埋土が沈むのにしたがって、瓦片が井戸中に入り込んでいったとみられる。今後の発掘調査で、井戸状遺構の中から唐代の遺物が発見されることが期待される。

石敷きおよび井戸状遺構の北西側では、クランク状

をなす平積みの塼の列が見つかった(写真 5)。この塼の列は建物の縁石にあたる雨落ちである。外側には小端平張り積みで塼を 1 段積み、その内側に塼を長手積みに積み、少し内側にずらすようにしてその上にもう 1 段、塼を長手積みにしている。塼積みのずれを防ぐために、外側の塼積みの塼と塼の目地にあたる部分に角が出るように塼が埋め込まれている。また、塼の列が直角をなす角の内側にも、同じく塼積みのずれを防ぐための塼が斜めに 1 個埋め込まれている。この建物は北西側に伸びると考えられるが、現時点では、規模・構造などの全容は不明である。

石敷きの北側では、同じく塼で構築された雨落ちの一部が見つかっている(写真 7)。外側に小端平張り積みで塼を 1 列並べ、その内側に低く段差をつけ、塼を小口積みに積む。その内側には、高く段差をつけて角が欠けた塼を長手積みにすることで、真ん中が一段低くなった溝を構築している。この雨落ちでも、外側の塼積みの塼と塼の目地にあたる部分に、塼の角が出るように塼が埋め込まれている。残念ながら、後代になって塼が抜き取られているが、この雨落ちの方向と石敷きの方向が一致することから、石敷きおよびこの雨落ちは関連し、この地点には一連の建物が存在していたと推定される。

東側の調査区では、帯状に瓦片を敷き詰めた状況が複数発見されている(写真 3)。現時点では、これらの瓦片は建物の基礎として用いられたと推測している。瓦片を敷き詰めたのち、その上に土壁を築いたものと考えられるが、その上部構造は検出できなかった。また、部分的には、この瓦片が路面の舗装として用いられていた可能性もある。

5. おわりに

7 世紀の後半から 8 世紀の初期にかけては、この地の支配を巡り、チュルク系遊牧民と唐、そして吐蕃が抗争を繰り広げた。スイヤブは異なる民族の衝突の場であり、シルロード交易の支配を巡る戦いの場であっ

たと同時に、西と東の文化と文明が出会い、さまざまな民族や宗教がともに生きた舞台であった。シルクロードという、交易、東西文化や文明の交流という言葉とイメージが先立ってしまいがちであり、思いのほか、その実態は明らかではない。スイヤブという遺跡は、東と西の街が物理的に隣り合っており、まさに東の世界と西の世界の接点であった。このスイヤブを発掘することは、その歴史のみならず、その文化や文明の接触や交流、この地に生きた人びととその生活、そしてその人びとが生み出した文化、人びとの信仰の実態を明らかにする重要な糸口となろう。今後、炭化種実や獣骨からみた食生活の解明、ソグド語文字資料や中国式の仏像の調査、さらには地形学の観点からの調査、漢文史料に基づく歴史研究など、多岐にわたる学際的なアプローチによってアク・ベシム遺跡の総合的な調査・研究を継続していく予定である。

最後にキルギス共和国国立科学アカデミーおよびバキッタマンバエヴァには本調査の実施に関し感謝申し上げます。次第である。

参考文献

- ・城倉正祥・山藤正敏・ナワビ矢麻・伝田郁夫・山内和也・バキッタマンバエヴァ 2017「キルギス共和国アク・ベシム遺跡の発掘(2015 年秋期)調査出土遺物の研究—土器・塼・杜懷宝碑編—」『WASEDA RILAS JOURNAL NO.5』早稲田大学 145-175 頁
- ・城倉正祥・山藤正敏・ナワビ矢麻・伝田郁夫・山内和也・バキッタマンバエヴァ 2017「キルギス共和国アク・ベシム遺跡の発掘(2015 年秋期)調査出土遺物の研究—土器・瓦編—」『WASEDA RILAS JOURNAL NO.6』早稲田大学 205-257 頁
- ・山内和也・櫛原功一・望月秀和 2018『キルギス共和国国立科学アカデミーと帝京大学文化財研究所によるキルギス共和国アク・ベシム遺跡の共同調査 2016』キルギス共和国国立科学アカデミー歴史遺産研究所・帝京大学文化財研究所
- ・山内和也・櫛原功一・望月秀和 2018「2017 年度アク・ベシム遺跡調査報告」『帝京大学文化財研究所 研究報告』第 17 集 121-168 頁。
- ・山内和也・バキッタマンバエヴァ 2019「スイヤブを掘る」『シルクロードを掘る—いま蘇る、いにしえの道—』資料集 帝京大学 49-60 頁